

## 南宋晚期吉州の士人における地域社会と宗族

—— 欧陽守道を例にして ——

小林 義 廣

## はじめに

現在、欧米の宋代史研究者を中心として、北宋と南宋との境目に士人の官界・政界に対する態度に断絶の存在することが共有の認識として広まっているように思える。つまり、北宋時期、中央政界に人材を送り込み姻戚関係を通じて互いに結束を維持してきた専門職エリート (professional elite) は、王安石の新法以後の党争の結果、一二世紀を境として没落して歴史の舞台を降り、それに代わって中央での出世には関心をもち、地域社会の中での威信の確立とその継承や、地域社会での利害に関心を寄せる地方縉紳 (local elite) が台頭し、時代の主役を担っていったというのである。こうした提

言をしたのは、いうまでもなく一九八二年に公表されたロバート・ハートウェル (Robert Hartwell) 氏の論文と、この論文の提言を敷衍した教え子のロバート・ハイムズ (Robert Hymes) 氏の著書であった。<sup>1)</sup>

両氏、ことにロバート・ハートウェル氏のこうした提言は、内藤湖南によって提出された唐と宋との間の歴史的变化の問題 (いわゆる唐宋変革) を、もう少し時間軸を延ばして、八世紀半ばから一六世紀中頃までの間に設定して、長期的展望に立って、人口・政治組織・政治の担い手などの諸側面から分析を加えて、この長期に互る歴史的变化の実相を明示しようとする論述の一環の中で提言されたものであった。そして、これらのロバート・ハートウェル氏の考えは、今世紀に入ってから、一一〇〇年から一五〇〇年までの間、すなわち歴史的に

大きな変動のあった唐後半・北宋時期と明代晩期・清初の間とに挟まれた南宋・元・明代初中期を、それらの変動時期と比較すると相対的に停滞した「宋元移行期」と名付けてひとまとまりに捉える提言に繋がっている。<sup>2)</sup>

こうした一連の研究動向の中においては、内藤湖南の「近世論」は、いわゆる唐宋変革論を提言した先駆的業績として触れられることはあっても、すでにその業績は歴史的使命を終えて、現時点における研究を推進する意味をもたない過去のものとして扱われているように見える。しかしながら、唐宋変革論を提言したとされる『支那近世史』を仔細に読むと、現在でも汲み取れる研究資源や示唆が含まれているように思える。そもそも『支那近世史』は、「第一章 近世史の意義」において、確かに唐と宋との間の歴史的变化の諸相（すなわち唐宋変革論）を類型的に論じているけれども、本書は、そうした唐宋変革の諸相を類型的に示すだけでなく、第二章以下は、いわゆる唐宋変革を経過して以後、宋代における君主独裁体制下の政治・社会・文化がどのように形作られ、それが南宋・元朝の下で変化を遂げながら、如何にして明清社会に繋がってゆくかを主に政治の流れを辿りながら論じている。ロバート・ハートウェル氏が提言した北宋と南宋の社会

的特質の相違といった論点も、実は『支那近世史』の中で、とりわけ「第十六章 蒙古人の統治と支那社会」において明確に指摘されている。内藤湖南によると、韓侂胄による慶元の党禁によって、朱子一派の道学派は朝廷から排斥されて官職に就けなくなり、そのため経世の志を持った道学派の士人は民間に逼塞して一階級を形成し、更に元代になって南人として引き続きモンゴル人から圧迫されたことよって、やがて一種の読書人階級が成立し、それが明清時代まで及んだというのである。<sup>4)</sup>

小論の取り扱う問題は、こうした一連の研究史上に位置づけられる。すなわち、内藤湖南の言説に従えば、読書人階級を成立させる最初の契機となった慶元の党禁以後の時代、要するに南宋晩期という時代において、地域社会（地方社会）で活躍した（内藤湖南の言葉では「民間社会」）一人の士人を考察の対象として取り上げるものである。その士人とは、歐陽守道という人物であるが、彼は次節以降に論述するように、科挙に合格し、任官の経験もあるけれども、生涯の大半を郷里の江西吉州の地域社会で過ごしたのである。

それでは、なぜ欧陽守道なのだろうか。第一の理由として挙げられるのは、彼の一族は、北宋時代に欧陽脩を生み出し

ており、歐陽脩は、歐陽守道とは異なつて、父母の埋葬時期を別にすれば、誕生から死去に至るまで当地で過ごしたことがなく、死後も開封の郊外に埋葬されている。ロバート・ハートウエル氏の言葉に従えば「専門職エリート」と言える存在である。歐陽守道は、そうした郷里と縁の薄い欧陽脩の在り方、ことに父系親族である宗族との関係に対して批判的であったのであり、その批判の中に南宋晩期という時代が刻印されているように思えるのである。要するに、江西吉州の欧陽氏一族は、北宋と南宋の時期に、それぞれの時代、郷里との関係において、対蹠的な生き方をした士人・士大夫を生み出しており、その意味で、欧陽守道を取り上げるとは、南宋時期の宗族の在り方を士人・士大夫が、どのように考えていたかを探求する格好の対象といえるのではなからうか。

ところで、欧陽守道を主題に取り上げた専論は、管見の限りでは見あたらないように思える。ただ、廖咸恵氏が風水師の社会的地位を扱った論文で、かつては士人・士大夫がともに交流すべき対象として取り合わなかった風水師が、南宋時期になって尊敬すべき職業となったとして、それを例証する材料として欧陽守道を取り上げている<sup>5)</sup>。また、アン・ヘリツェン (Ann Gerrißen) 氏は、南宋から明代中期までの江

西吉州地域を対象として、寺・観・廟に残された碑文を手掛かりに、自然景観に対する士人・士大夫の眼差しの変化に視点を据えながら士人・士大夫が地域社会に対する所属意識・アイデンティティの問題を追究しようとした著書の中で、宗教施設や宗教的実践活動が地域の統合に果たす役割をみつめつつも、儒教的立場から宗教的実践に修正を加えようとした士人として、欧陽守道やその弟子の劉辰翁を取り上げている<sup>6)</sup>。

小論は、こうした先行研究を意識しながらも、あくまで欧陽守道が在地の士人としての立場から地域社会の中でどのように生き抜き、自己の宗族とどのように関わろうとしたのかを中心に探求を進めたい。

## 一 欧陽守道小伝

欧陽守道の在地活動や自己の宗族との関わりを論じてゆく前に、彼の生涯を簡単に辿ってみよう。欧陽守道に関しては、『宋人伝記資料索引』（台湾・鼎文書局、一九七六年）や『宋人伝記資料索引補編』（四川大学出版社、一九九四年）を検索しても分かるように、その家族関係や官歴を詳細に窺える

行状・神道碑銘・墓誌銘・年譜といった史料・資料は存在しない。また、『宋人伝記資料索引』には、歐陽守道の文集『巽齋文集』に「巽齋先生伝」が附載されていることを伝えるが、普通に見られる二七巻本の四庫全書影印本『巽齋文集』には、この伝記の附載はない。現存する宋人の文集の所蔵場所を記した『現存宋人別集版本目録』（巴蜀書社、一九九〇年）は、中国・台湾だけでなく日本における所蔵場所も記している。それを見ると、「巽齋先生伝」を附載した『巽齋文集』は、北京大学を初めとした中国大陸のいくつかの機関にあることを記載しているが、日本の研究機関の所蔵を示していないし、管見の限りでも、日本の主な研究機関の所蔵を確認できなかった。したがって、小論の「小伝」は、『宋史』巻四一一の本伝を主な材料にして記述する。なお、欧陽氏一族の宋代以後の世系に関する詳細で正確な欧陽漸等撰『欧陽安福府君六宗通譜』（不分巻、一七冊、一九三七年刊、以下、『通譜』と略称）にも「巽齋公伝」を載せているが、字句から判断して基本的には『宋史』本伝に基づいているように思える。<sup>7</sup>

『宋史』巻四一一の本伝は、『宋史』の列伝の多くがそうであるように、欧陽守道の生没年を記していない。しかし、欧陽守道に教えを受けた文天祥の「祭欧陽巽齋先生」と題する

祭文には、欧陽守道が咸淳九年（一二七三）正月に六五歳で亡くなったことを記し、<sup>8</sup> それを受けて『文天祥全集』（江西人民出版社、一九八七年）所収の熊飛『文天祥年譜』の咸淳九年の条にも、「正月七日、欧陽守道卒、為文祭欧陽巽齋先生」という記述を見出せる（七三三頁）。とすれば、欧陽守道は、理宗の嘉定二年（一二〇九）に誕生して、<sup>9</sup> 度宗の咸淳九年（一二七三）に生涯を閉じたということになる。死去から三年後の一二七六年に南宋の都の臨安はモンゴル軍に無血開城されるのであるから、欧陽守道は南宋の最晩年に活躍した人物だといえよう。

欧陽守道は、字を公権あるいは迂父というが、元々の諱は巽といい、この本来の諱に因んで、自分の書齋を巽齋と名付けた。<sup>10</sup> 郷里は吉州廬陵県永和鎮。父親は欧陽悦（字は叔和）、母親は胡氏。欧陽悦と胡氏の間には、欧陽守道の兄にあたる欧陽晋卿という息子も生まれている。<sup>11</sup> 父親は、早くに亡くなったらしいが、欧陽守道は父親の思い出として科挙の受験勉強を始めたとき、詩書の読書を命ぜられながら、詩文の作成は許されなかったと語っている。<sup>12</sup> 少なくとも科挙の受験勉強を始める五〜六歳頃までは健在であったのではなからうか。父親の死後は貧窮のために農作業の下働き（賤藝）ま

で行って自力で勉強に励み、その甲斐があつてか三〇歳前には近隣の子弟を教えて生計を立てるようになっていた。<sup>13</sup> このときの母親に対する親孝行の逸話が伝えられている。家庭教師先の趙家では、食事を出していたらしいが、守道はその中の肉には手を付けずに母親のために持ち帰っていた。その様子を見た趙家では、二人分の食事を用意していたところ、守道も肉に手を付けたといい、そのことを知った隣家の母子は守道の孝行ぶりをしきりに感心したという。<sup>14</sup>

同じ三〇歳頃のことである。兄嫁が亡くなって演と浚という二人の遺児を引き取ることになった。<sup>15</sup> 浚は誕生して数か月しか経っておらず、守道も独身であつたから、毎日、近隣に母乳を求めて苦労した。そうして育てた子供であつたが、演は長じるといふこともなく姿を眩まし、守道はそれを泣きながら探し歩いたが、ついに見つからず、そのため三年も肉食を絶つたという。

貧窮は相変わらず続き、理宗の淳祐元年（辛酉、一二四二）になって科挙に及第した。この時の状元は温州（浙江省温州市）出身の徐儼夫という人物で、守道の天子に対する応答が素晴らしいものであつただけに、合格発表後、徐儼夫は守道の手を握って「君の上になつたことを恥ずかしく思

う。君の文章は私よりも上だ」と述べたという。同時期の合格者には、『玉海』『困学紀聞』の著者として著名な王忠麟もいた。<sup>16</sup> 科挙及第後、守道は贛州雩都県（江西省于都県）の主簿に任命されたが、老母扶養を理由にして辞退している。<sup>17</sup>

その前年、嘉熙四年（一二四〇）のことである。欧陽守道は、秋に吉州で郷試を受験しているが、この年、江万里（一一九八―一二七四）が吉州の知事として赴任してきた。江万里は郷試に合格し、郷貢進士となつた守道に注目し、翌淳祐元年、江万里が吉州の地に江西廬山の麓にある著名な白鹿洞書院に做つて白鷺洲書院を創建すると、その教師に守道を招いた。しかし、彼は一月も経たずに退任して自分の家に帰つたらしい。<sup>18</sup> このときも老母の扶養のためであろう。ところで、母親の胡氏は、残された史料に拠る限り、淳祐八年（一二四八）の時点で、病気がちで衰弱しながらも八一歳で健在であつたことが知られるが、このときの衰弱ぶりからすると、それからあまり年月が経たないときに亡くなつたと思われる。喪が明けると、守道は贛州の司戸という州の経済関係を扱う職務に任命された。

白鷺洲書院との縁は、その後も切れていなかったという指摘がある。欧陽守道と深い関わりをもつ江万里・文天祥・劉

辰翁といった人物の、近人の手になる年譜を見ると、白鷺洲書院に対する守道の後年の関わりに言及しているからである。これらの年譜は、文天祥が科擧に状元及第する前年の宝祐三年（一二五五）に白鷺洲書院で学んだとき、書院の責任者（「山長」）は欧陽守道であったと特筆しているのである。<sup>20</sup>

とはいえ、結論を先取りすると、これらの指摘は誤っていると思われる。欧陽守道の「経訓堂記」（『巽斎文集』卷一五）には、「予、廬陵の族なり、宝祐癸丑（元年——引用者）夏四月、始めて長沙に來たりて、嶽麓書院に読書す（予廬陵族也、宝祐癸丑夏四月、始來長沙、読書嶽麓書院）」とあり、また嶽麓書院における熱心な受業の弟子の周義甫という人物が郷里の潭州醴陵県（湖南省醴陵県）に帰郷するに際して記した「義甫説贈周義甫」（『巽斎文集』卷二五）と題する文章には、末尾近くに「宝祐二年七月既望」という日付がある。しかも、景定四年（一二六三）一〇月の日付が末尾にある、既出の「白鷺洲書院山長序記」（『巽斎文集』卷一七）にも、江万里が白鷺洲書院を創建したときに、その書院にいたことは記すが、その後、この書院の「山長」に関する記述に自分が山長であったことに全く触れていない。要するに、宝祐三年に文天祥が欧陽守道に学んだのは、吉州の白鷺洲書院ではなく、潭州（長

沙）の嶽麓書院ではなかったかと推測されるのである。この嶽麓書院では、長沙在住の一族の欧陽新という人物に始めて会い、長沙の一族の世系を話題にしたりしており、篤学な欧陽新をこの書院の「講書」に推薦し、彼が亡くなると新の子供を当局に推薦して吉州に帰還した。

『宋史』の本伝によると、欧陽守道は、荆湖南路（副）転運使（湖南運使）となった呉子良の招きを受けて長沙にある嶽麓書院の副山長となり、一族の欧陽新と息子の欧陽必泰が守道を訪ねてきたとある。上述のように、嶽麓書院に在職していたのは、『巽斎文集』の記述によるかぎり、宝祐年間のことと考えられる。そもそも呉子良の湖南運使就任は、景定三年（一二六二）であるようだが、『南宋館閣統録』によると、欧陽守道は景定年間以後、次々に秘書正字・校書郎・秘書郎になっている。<sup>21</sup>これらは館職といって朝廷に集められた書籍の整理・校勘を業務とするが、その一方で将来の国政の中心を担う人材が就く役職でもある。<sup>22</sup>当然、欧陽守道は仕事柄から中央にいたのであって、景定年間に嶽麓書院に勤務していたとは思われない。この都在職していたとき、宿舍が近いこともあって、文名の高かった晩年の劉克莊（一一八七—一二六九）とも親しく付き合があった。<sup>23</sup>

歐陽守道は、理宗が亡くなる少し前に秘書郎であったとき、宮廷の無駄な出費を節約すべきことを主張して、それが受け入れられないとみると、辞職をして都を後にして帰郷した。その後、度宗の咸淳三年（一二六七）、推薦によつて建昌軍（江西省南城県）の通判に任命されるが、それも辞退した。それから数年して咸淳九年（一二七三）、静かに郷里の自宅で生涯を閉じた。家には一銭の財産も残っていないかつたという。彼の弟子には既出の文天祥の他、同郷の劉辰翁（一二三二～一二九七）が特筆される<sup>26</sup>。その文天祥は、歐陽守道の生涯を、多くの弟子を育て、歐陽脩の学問を受け継いだと総括しており、『宋史』の本伝の直ぐ後の論贊でも、「歐陽守道、廬陵の醇儒なり」という評価を下している。

## 二 一 歐陽守道と地域社会

前節の記述から知られるように、歐陽守道は、晩年の一時期を都で官位に就いた他は、生涯の大部分を郷里の廬陵県で地域社会の士人として過ごした。彼は在地の士人として、地域社会の課題に強い関心を抱き、地域の問題点を守令に具申する一方で、具体的な行動に移そうとしている。そうした守

令への提言や実践活動の幾つかをみてみよう。

最初に吉州知事の諮問に答えて吉州の実状を書面にして提出した「与王吉州論郡政書」（『巽齋文集』巻四）と題する文章を取り上げよう。ただ、この文章には二つほど問題がある。一つは、ここにいう「王吉州」が誰なのかは、現在、残っている当地の地方志である『万曆吉安府志』『順治吉安府志』『乾隆吉安府志』『光緒吉安府志』の「秩官表」あるいは「秩官志」は、該当する理宗朝・度宗朝といった南宋末の部分が簡略すぎて特定できない点である。だが、時期は推測できる。文章中に二〇～三〇軒の金持ちの家が強盗に襲われたとき、丁度、長沙に滞在していたという文言があり、そこから前節で触れた歐陽守道が嶽麓書院で講義をしていた宝祐年間（一二五三～一二五八）前半の頃だと推定できる。二つ目の問題は、この「与王吉州論郡政書」と題する文章が、四庫全書本の『巽齋文集』では最後の部分が欠けていて不完全である点である。とはいえ、この文章は、全部で一六葉もある長文で、内容もかなり具体的・豊富であり、南宋末の吉州の状況を活写していて興味深い。

歐陽守道は、吉州の当面の問題として三点を挙げている。まず第一に住民の食糧不足が焦眉の急だという点である（今

者民食最急」。食糧不足は米価の高騰を招いているが、その高騰を厳禁するだけでは問題の解決にならないと述べ、その解決には何よりも贛江を使った円滑な米の舟運に気を配ることと、「富家」に余分の米を吐き出させる適切な処置を講ずることとをすれば自然と米価は落ち着くと提言する。この食糧問題に関する記述は、残っている文章の半分近くを占め、それだけに歐陽守道の最も関心を寄せる問題であったと思われる。第二の問題は「賊盜」である。この問題は、墓荒らしや人身売買、更には食糧財産の掠奪行為との三つに分けられるという。墓荒らしについては、吉州は、もともと墓地をめぐる訴訟が多い土地柄だが、州城に近い場所では、昼に埋葬を終えたかと思うと、夜には墓が荒らされて、身ぐるみが剥がされた遺体が野ざらしにされる事件が多発しているという。人身売買については、それに携わるのは特別の間人ではなく、普段は良民面している者が貧しい家の婦女・子供を誘拐して売り飛ばしており、実際に近隣の州郡の僻地には奴婢に売り飛ばされたと思われる吉州人が多い。いずれにせよ、こうした「賊盜」は、食糧不足の年に起きやすいので、充分に注意を払い取り締まるようにと主張している。第三の問題は疫病である。吉州では疫病が流行すると、医者にかかるの

ではなく、祈祷師に頼る民衆が多く、そのために祈祷の出費も嵩み、しかも病人が出た家では、伝染を恐れて元気な者は病人を放っておいて余所に行ってしまう。しかし、守道によると、これらの疫病は、汚水の垂れ流しなどの悪い衛生状態に起因するのだから、下水道を浚渫するなどの衛生面に気をつけるべきだと提言している。

食糧不足に基づく飢饉の発生に強い関心を寄せる歐陽守道は、守令に対策を提言するだけでなく、具体的な解決策に向けて行動に移そうとしていたらしい。彼は、社会の重要性を認識していたのである。弟子の劉辰翁の記述によると、歐陽守道は吉州の北隣に位置する臨江軍新喻県の劉氏の社会条約を見て感心し、まずはその社会条約を廬陵でも広めようとしていたという。更にそれだけでなく、実際に飢饉が発生すると、飢餓民が橋から身を投げる現実がありながら、官辺も在地の士人も何ら有効な対策を講じない状況を嘆き、自分の衣服を米に替えて粥を飢民に施していた。<sup>20</sup> むろん、飢饉に積極的に賑恤活動をした人物に対しては、それを口を極めて称揚した。守道と同時期に科挙を受験した張応瑞という人物の父親は、諱を謨、字を舜申といった。張謨は、飢饉に備えて粟を蓄え、飢饉に際しては原価でそれを地域の人びとに貸し与



え、そのために餓死する人が無く、盗賊でさえ、その家だけは掠奪をさけたという。守道は、こうした善行を取り上げながら、こうした行為は特別の善行とはいえないが、彼を称揚することで張謐と同様の行動に移そうとする人が少しでも出現すれば、この地域も安楽な場所となるであろうと、張謐のよくな人間の続出に期待を込めていた<sup>20)</sup>。

飢饉と食糧不足は、吉州とその治所である廬陵県を疲弊させていたであろう。やはり、時期と具体的守令名が確定できない吉州知事に向けた書簡で、欧陽守道は、吉州は豊かな州といわれているけれども、現在、十室のうち九室も人が住んでいない状況なのに、お上りが吉州から買い上げる穀物は他州の倍にも達していると不満を述べている。また、上述の「与王吉州論郡政書」と題する文章で、欧陽守道は飢饉が盗賊の横行を招来すると述べていたが、南宋最末期、咸淳四年（一二二八）に吉州知事を離任し都に帰る倪普に対して、水害・干害・盗賊問題を帰任報告として天子に上申することを求めている。ここには、南宋末期吉州の社会状況が色濃く反映されている。この他、欧陽守道は、廬陵県知事に対して、有為の人材を育成することが結局は民衆を善導することになるとして県の学校を十全に機能させること、ことに優れた人材を

県学の教師に招くことを強く求める書簡を送っている。<sup>21)</sup>

最後に守令に対する働きかけの実例が『宋史』の本伝に載っている。話を紹介しよう。話は、守道が嶽麓書院から郷里に帰って以降のものとして記されている。張某が父親を亡くし、一周忌（「小祥」）を迎えようとしたとき、母方のオジ（「舅」）から訴訟を起こされ、そのために獄に繋がれてしまった。張は、一周忌の祭りを行えないまでも、自分の土地を処分しても父親を埋葬したいと切に願っていた。このことを耳にした守道は、父親の霊前にお参りできないのは、何とも痛ましいと思つて、県知事に対して、「これは人の情に背き、父親を祭祀しようするのに、それを軽んじ、父親を埋葬しようとするのに、その機会を奪っている行為だ。このようなことをするオジは、まさに自分で自分の骨肉の肉を食べているようなものだ。一旦、この息子を獄から出して、一周忌の祭祀を終えさせて、それから再び収獄したらどうか（此非人心、浜祭而薄之、撓葬而奪之、舅如此、是自食其肉也、請任斯子出、祭而復獄）」と提言し、それを受けて知事は、張某を解放した。問題のオジは、守道の悪口をさんざんと言いつつ触らしたが、守道は一向に気にしなかったという。

とまれ、欧陽守道は、在地の士人として地域社会の問題点

を肌で感じて、それを治政に生かすように守令に提言しつづけていた。こうした提言からは、南宋末の混乱した社会状況を窺える。そして、彼は、学問を講じて弟子を育て上げるだけの学者先生ではなかったのであり、学問を実践に移すだけの気構えをもった士人であろうとした。

### 三 欧陽氏一族と欧陽守道

#### I 永和派欧陽氏と欧陽守道

それでは、生涯の大部分を在地の士人として過ごした欧陽守道は、自分の一族とどのように関わり合い、一族の在り方を如何に考えていたのだろうか。そうした考察に行く前に、まず欧陽守道の家系を確認しておきたい。

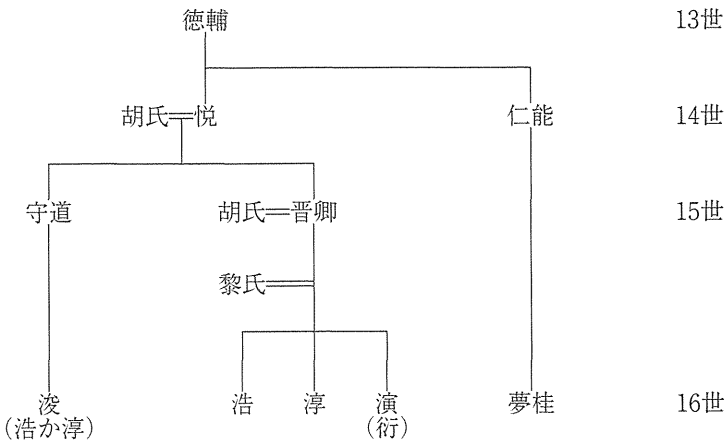
宋代吉州の欧陽氏一族に関して、私は、既に欧陽脩(二〇〇七―一〇七二)との関連で考察したことがある。そこで論じたように、欧陽氏一族が江西吉州に定住する契機となったのは、欧陽脩が作成した一族の族譜の「欧陽氏譜図」に記すように、唐代に吉州刺史となった欧陽琮であるといわれる(唐代の何時かについては議論があり、後述する)。その子孫が長沙から吉州に移住したからである。唐末に欧陽琮

の八世の孫といわれる欧陽万が吉州安福令となったが、「欧陽氏譜図」は、この欧陽万の子孫を中心として、吉州各県の、廬陵・吉水・安福などに居住してきた族人のために作成された。前掲の『通譜』の「欧陽安福府君六宗通譜」という標題も、欧陽万(安福府君)の子孫であることを示した称谓であり、具体的には欧陽万の玄孫に当たる謨・託・諒・堂・弘(宏)・戊(欧陽氏譜図)は該は遠、堂と弘は某、戊は戊に作る)を始祖とする支派であつて、彼らは廬陵か安福に住まいを構えていたのである。ちなみに、『通譜』の世代数は、欧陽万を第一世代として数えており、支派の始祖からではない。小論も、その数え方に従う。

欧陽守道は、『通譜』の「巽齋公伝」によると、廬陵県永和鎮に居住した欧陽堂を祖とする支派に属しており、欧陽万から数えて一五代目である。事実、父親の墓は廬陵県治の西方六〇里の龍須山に有つたようであるが、それとは別に三世代の祖先の墓地が永和鎮儒行郷の梅山にあつたと欧陽守道自身が記している。この永和鎮に住む欧陽氏一族は、学問によって知られ、科擧及第者も永和の支派から多く輩出したといわれる。しかも、南宋後半期には族人の数も相当数いたと思われる。欧陽守道によると、永和鎮の一族だけでなく、吉州全

体を含むが、一族が戸数で二百、丁数で一千人を数えると述べているからである。<sup>⑩</sup> それ故にこそ、ことに永和鎮の欧陽氏一族は、それなりの組織性を持っていたらしく、守道が生まれる数年前の嘉泰三年（一二〇三）に六九歳で亡くなった欧陽彝（字は元鼎）は、族長として一族を統率し、族譜の編纂にも参加していた。<sup>⑪</sup>

欧陽守道の直系の祖先は、次に掲げる家系の略図に見るように、祖父が徳輔、父親が悦（字が叔和）、兄が晋卿である。『通譜』に曾祖父を主簿と記しているのは、名前ではなく県の出納と帳簿を与る県主簿という官職名である可能性がある。子供は浚であるが、守道は結婚した形跡が無く、これは第一節で触れたように、兄嫁が亡くなって兄の遺児を引き取った中の、下の子供の浚をいつの時点かで養子にしたのであろう。『通譜』に、兄晋卿の子供として衍・淳（字は太初）・浩の三人が載っているが、衍は音通から『宋史』欧陽守道伝に見え、成長の後に姿を眩ました演かも知れない。そして、淳か浩のどちらかが浚なのであろう。注目すべきは、この家系図に端的に示されているように、欧陽守道をめぐる姻戚関係はよく分ならず、したがつて姻戚関係の広がり極めて狭小な点である。これは、何よりも欧陽守道が結婚した形跡がないこと



〔欧陽守道の家系〕（欧陽漸 等撰『欧陽安福府君六宗通譜』に依拠）

と関わるだろうが、それにしても残された史料に拠る限り、姻戚関係に対する欧陽守道の言及は見出せず、欧陽氏一族のような族人の丁数が一千人を超える宗族としては、この現象は珍しいといわねばならない。

ところで、第一節の「欧陽守道小伝」でも言及したように、父の欧陽悦は、幼い守道に詩書の読書を命じながら、詩文の作成は許さなかったということからすると、学習方法にそれなりの一言言を持っていて、ある程度の学識をもった教養人であったと推測できよう。加えて、守道が子供に学問の大切さを諭した「勸学箴」に、「爾が祖は予の父なり。予の父は予の師にして疊疊（くりかえし）晦言し（おしえさとし）、其の識知を開く」とあって（『巽齋文集』巻二七）、父親が繰り返し教え諭して守道の知識向上を計ってくれたと述べていることは、そうした傍証となろう。しかし、祖父を含めた上の世代の先祖が学識を有していたのかどうかは、管見の限り、それらを窺わせる史料を見出せない。

## Ⅱ 欧陽脩「欧陽氏譜図」と欧陽守道

欧陽守道は、宗族とどのように関わっていたのか、あるいは関わろうとしたのかという問題であるが、自己の一族に対

する彼の具体的働きかけは、残された史料からは窺うことができない。そこで、ここでは族譜に対する彼の考えを手掛かりに、この問題を考えてゆきたい。

宋元時代の族譜の「序文」を手掛かりに、この時期の修譜の特色を考察した森田憲司氏によると、南宋に入ると修譜に関する史料が増加し、かつては一族内部の人物が記していた序文も、南宋末から族外の名人に依頼する傾向が始まり、それが元代に継承されると指摘している。<sup>⑩</sup>この指摘は、吉州の場合にもそのまま当てはまると思われる。たとえば、劉辰翁は吉州の三つの宗族の序文を書き、文天祥は一つの同郷宗族の序文を記述している。<sup>⑪</sup>そもそも、吉州を郷里とする欧陽脩が編纂した「欧陽氏譜図」は、蘇洵の「蘇氏族譜」とともに、宋代以後の、いわゆる「近世譜」の模範とされ、<sup>⑫</sup>そのためもあって吉州は、宗族結合の盛んな地域だとされる。<sup>⑬</sup>

欧陽脩は、「欧陽氏譜図」編纂だけでなく、政治・文学・史学などさまざまな分野における傑出した活躍によって、当地が生み出した著名人であり、吉州の人びとにとって郷土の誇りであったのである。こんな話が伝わっている。楊長孺（号は東山）という吉州吉水県出身の人物がいる。彼は、楊万里（一一二七―一二〇六）の息子であり、楊万里は孝宗朝中に

中央政界で活躍する一方、詩文に巧みで尤袤・陸游・范成大とともに南宋四大家に数えられる吉州出身の著名人である。この楊長孺が広東経略按撫使であったとき、たまたま転運使、提挙常平使、市舶使と懇談する機会があつて郷土の産物自慢となり、他の三人はそれぞれ郷土の果物や魚介類を挙げたが、長孺は「これといった産物はありませんが、唯一、欧陽子という一人物を生み出したことが自慢といえは自慢です（他無所産、但産一欧陽子耳）」と答えて、他の三人の笑いを誘い恥じ入らせたという。<sup>⑤</sup>

欧陽守道も、欧陽脩を「吾が家の六一（翁・公）」「吾が家の文忠」といった言い方をして身内であることを誇らしげに語っているけれども、それと同時に、江万里が吉州知事であつた淳祐元年（一二四一）、欧陽脩の何代後の子孫かと訊ねられたとき、欧陽脩が父母を顕彰するために撰述した「瀧岡阡表」に載る人たちと自分の先祖は一つも重なっていないと直接的な繋がりを断固として否定している。<sup>⑥</sup> 欧陽守道にとって、欧陽脩は自己の一族中の著名人ではあるが、複雑な想いを抱かせる遠い存在であつたと思われる。そうした微妙に揺れ動く感情が、欧陽脩の「欧陽氏譜図」に対する見解に現れる。「欧陽氏譜図」に対する彼の見解について、私は、これまでに触

れたことがあるが、ここでは少し丁寧に紹介してみよう。

「欧陽守道が『欧陽氏譜図』に対して纏まつた見解を示しているのは、『書欧陽氏族譜』と題する文章である（『異齋文集』巻一九）。まず、欧陽守道は、吉州に欧陽氏一族が居住する契機となつたのは、唐代中頃の欧陽琮（刺史府君）で、それは今から五百余年ばかり前のことであつたと語り、更に現在、吉州には百戸を数える戸数と千人を超える男子成人を擁していると、一族の繁栄振りを誇っている。その吉州欧陽氏一族の中で最も傑出した人物が欧陽脩であり、族譜は著名な族人によつて撰述されるので、族譜を欧陽脩が作成したことは当然であると、『欧陽氏譜図』編纂の正統性を一応は認めている。しかし、この族譜は族人の掲載範囲が狭く、しかも誤りも多いと述べている（然公譜未広、又頗有誤）。この後、『欧陽氏譜図』の問題点を次のように指摘する。

「欧陽氏譜図」では、欧陽通（『藝文類聚』を編纂し、書家としても有名な欧陽詢の息子）の三世代後に欧陽琮が生まれて吉州刺史となり、唐末に黃巢の乱が勃発して当地にも賊軍がやってきたとき、欧陽琮は州民を率いて地域を守つたとある。この欧陽琮から八世代後の子孫が吉州安福令となつた欧陽万である。そして、欧陽万の八世代後の子孫が欧陽柳で、

彼は南唐に仕えたといふのである。とすれば、欧陽琮以下、

一七世代のうち、三世代が吉州で仕えたといふことになる。

だが、「歐陽氏譜圖」によると、欧陽琮は欧陽詢（率更令）の孫で、欧陽詢と欧陽通の親子は唐初の人なのに、欧陽詢の四世代の孫（欧陽琮）が黄巢の乱に際して郷土防衛に当たっていることになる。黄巢の乱は、僖宗朝の出来事である。つまり、唐が天下を支配して二六〇余年も経っており、唐の皇帝は一六代目になっている。それなのに、我が一族は僅かに四代を重ねているに過ぎない。更に（吉州軍事推官）欧陽栢は（吉州刺史）欧陽琮の一四世の孫といふことになっている。とすれば、欧陽琮が黄巢の乱の防衛に当たっているのに、一四代も後の欧陽栢が南唐に仕えていることになる。南唐は命脈が僅か四〇・五〇年にしか過ぎない政権であるのに、我が一族は一四世代も経過しているのだ、と。欧陽守道は、こうした点を疑問として挙げて、将来の人も同様な点を察知するであろうと主張するのである。

以上のような疑問を欧陽守道は書き連ねて、次に欧陽琮の活躍した時代を遡らせる考証をする。その考察の手掛かりは、「唐欧陽瑋碑」という碑文である。この碑文は、もともと顔真卿が撰文し、それを元に欧陽脩が一族の考証に役立てたと

語る跋文がある（『歐陽文忠公集』集古録跋尾卷七）。欧陽守道は、この跋文に依拠して、欧陽瑋と欧陽琮は、同じ「玉」を部首としているので、二人は従兄弟であり、しかも欧陽瑋は大歴年間（七六六～七七九）に亡くなっているので、欧陽琮もこの頃の人に違いないといふのである。そして、黄巢の乱に際して郷土を防衛したのは、欧陽琮から更に六～七世代を経過した子孫だったと推論する。次に欧陽守道は、こうした間違いを欧陽脩が犯した理由を批判的に述べる。

文忠公四方を遊宦し、帰郷の日幾ばくも無し。其の修譜は又族人に咨（はか）る暇あらず。是を以て数世の近・直下の派と雖も、而れども屢は失亡する有り。最後は独り之を呂夏卿に質（た）して以て的拠と為す。夏卿は博学と雖も、安（い）んぞ能く尽く他人の世系の詳らかなるを知らんや。

つまり、欧陽脩がそれほど郷里に居たこともなく、したがって族人に充分な相談もせず、しかも最後に欧陽氏一族にとつては赤の他人に過ぎない呂夏卿に相談して完成させたことを、その理由に挙げている。呂夏卿は、譜学に精通し、欧陽脩も参加した『新唐書』の、「宰相世系表」を実質的に編纂した人物だといわれるが、守道からすると、その博学の人物でさえも、他人の世系をそれほど詳細に知っているはずがな

いというのである。

この「書歐陽氏族譜」を検討してみると、守道の批判は、世系に纏わる欧陽脩の誤謬は、単に族人に相談できるほど欧陽脩が郷里に滞在していなかったというだけの内容ではない。欧陽守道は、吉州の各県に散在する一族の族譜を六〜七篇ほど自ら実見し、それらは分量が多く、記述が詳細であること、更に隣州の臨江軍清江県・袁州宜春県・荊湖南路長沙の一族の族譜も実際にみると、相違点がかなりあることを指摘し、いずれにせよ細かく校訂しなければ正しい系譜を確定できないと結ぶ。欧陽脩自身も、「(石本) 欧陽氏譜図」の「序」には、「皇祐至和の間に至りて、其の家の旧譜を以て、族人に問い、各の其の蔵する所の諸本を得て、以て其の異同を考正し、その世次を列して、譜図一篇を為る」とあるように、一族の様々な族譜を実見しており、守道もこの「(石本) 欧陽氏譜図」を見て、そのことを当然に知っていたはずである。それでも、上述の引用文のような批判がなされるのは、短期間の郷里滞在中、結局は系譜の十分な実見と検証を犠牲にしたのではないかとの資料編纂上に対する批判的口吻が感ぜられる。歴史家としての欧陽脩に批判の一石を投じたのではなからうか。

いずれにせよ、既に別稿で論じたように、欧陽脩が生涯に互って郷里に住むことなく、致仕後も郷里とは別の潁州(安徽省阜陽市)に隠居したことに対する批判的な眼差しを窺える。守道は、欧陽脩の郷里に建てられた「六一祠堂」を訪ねて作ったという人物の詩に事寄せて、欧陽脩のこうした郷里との関わり方をあげつらっている。<sup>51</sup> 別稿でも取り上げた史料だが、守道の批判的言辞が如実に示されており、少し丁寧にその論理を辿ってみよう。この文章は、まず、欧陽脩が誕生した場所、成長した場所、官僚として過ごした場所、引退後に過ごした場所、死後に埋葬された場所、そのいずれをとっても郷里の吉州永豊県ではなかったと指摘する。その上で、郷里への訪問は父親の欧陽観と母親の鄭氏を埋葬した二度でしかなく、しかも最初の父親の埋葬時には幼すぎて郷里の墳墓の状況も分からなかったはずだと述べる。更に、欧陽脩は晩年に父母の墓参りを兼ねて、郷里近くの洪州(江西省南昌)の知事を願い出るが、それは実現せず、墓地の管理は郷里在住の従兄弟に依頼し、その上、祖父以上の墓地の管理はお金を出して在地の農民に任せていたことを明らかにする。<sup>52</sup> そして言う。こうしたことからすると、郷里の永豊県沙溪鎮瀧岡に父母を顕彰するために建てられた「瀧岡阡表」は、確

かに見る者を感動させはするが、この人物の詩が言外に臭わしているように欧陽脩の郷里との関わりに問題があると述べ、次のように結論づける。

嗚呼、茲の事、洪容齋（洪邁）嘗て極めて之を歎く。外坐して馬少游の平生の語を念えば、益す以て悽然（かなしきこと）たり。

馬少游は後漢の人で馬援の従弟。馬援が交趾に遠征したとき、かつて少游が故郷で生涯をおくる楽しみを語ったことを想い出したという<sup>⑧</sup>。欧陽守道は、この故事を引き合いに出して、欧陽脩の郷里との稀薄な関係を批判しているのである。

ところで、この引用文中の洪邁（一一二〇―一一七四）とは、文章に巧みで孝宗朝に周必大（一一二六―一二〇四）とともに詞臣として中央で活躍した人物だが、現代の、宋代に興味を抱く研究者には、『容齋隨筆』や『夷堅志』の作者としてよく知られている。その『容齋隨筆』に、欧陽脩が穎州を終焉の地と決めて以来、穎州を思つて作つた十余篇の詩（「思穎詩」）を取り上げて、次のように批判している。つまり、故郷を離れて暮らすことはやむをえないにしても、墳墓の地を離れた場所に住むことを誇つて詩にすべきではないのだ、と。洪邁の郷里の鄱陽は、宋代の区画では江東路に属す

るが、現在は江西省の東北部に位置する場所で、こうした酷評の背景に、「はじめに」で取り上げたような、南宋になつて士人が在地化するというハートウエル・ハイムズ・内藤湖南らの指摘の如実な実例を示す同郷意識を窺うことができるかも知れない<sup>⑨</sup>。同郷といえ、江西廬陵県出身で南宋後半期に活躍した羅大経にも、同じく「思穎詩」を取り上げ、周必大が退休後に郷里で隠退生活を送つたことを引き合いに出しながら、欧陽脩の郷里に対する態度を批判している<sup>⑩</sup>。これらには、南宋士人の郷里に対する基本的な立場や意識が明瞭に現れており、欧陽守道の批判も、こうしたものの一環として理解すべきものであらう。

とまれ、こうした在地士人の立場と意識は別にして、欧陽守道は、系譜は無理に遠祖に繋げる必要はなく、確実に辿れる世代から世系を組み立てるべきだと考えていた。欧陽氏一族に関しては、政治的に混乱していた唐宋・五代ではなく、世の中が安定した宋代に入つて以降が確実に世系を辿れるのだという<sup>⑪</sup>。



### III 欧陽守道の宗族観念

それでは、欧陽守道は族譜や系譜の役割をどのように見ているのであろうか。それをかなり明確に述べているのは、前項の最後に取り上げた「黄師董族譜序」（『巽斎文集』巻一一）と題する文章である。この文章において、系譜は確実に辿れる宋朝の建国以降から繋げるべきで、その点で黄師董という人物が実際に見せてくれた族譜は信用できると主張する。そして、欧陽氏一族や黄氏一族が代々暮らしてきた「江右」は、靖康の変以後の南宋時期において、幸いにも比較的平和な状態を享受してきたと語り、その後、次のように続ける。

先世の出ずる所を知れば、則ち夫の墳墓かの当に保つべく、族類いっくしむの当に恤むべき、門戸の当に念うべき、身を立て己を行うの当に負うべからざるべし。

つまり、族譜をみることによつて、墳墓や一族の大切さを意識し、更には世の中で自分の身を処してゆく上で一族の在り方に背かないように自覚できるというのである。そして引用文の後、最後に、代々、書香の家として科擧及第者を輩出してきた一族の伝統に想いを致して、黄師董も身を引き締める

べきだと結ぶ（「黄氏亢宗不在茲乎、君必勉之」）。

黄氏一族をめぐるこの議論は、欧陽氏一族にもそのまま当てはまると、少なくとも欧陽守道は考えていた。既述のように、欧陽守道は、嶽麓書院に滞在していたとき、長沙の一族と会い、その欧陽新という族人から「経訓堂」という長沙一族の教育施設に関する文章の起草を依頼されていた。その結果、記述されたのが「経訓堂記」（『巽斎文集』巻一五）と題する文章であるが、その中で、欧陽氏は漢代の欧陽生が学官として経学を講じて以来、儒学の伝統をもった家であること、更には北宋の欧陽脩が文章・学問で一世を風靡したことを取り上げ、「欧陽氏は必ず文学を以て著聞し、尽くは同じからずと雖も、而れども大較は見るべきのみ」と述べて、欧陽氏一族は学問（「文学」）を伝統とすることを強調している。ここには、欧陽氏一族の族譜に関する直接の言及はないけれども、こうした一族の系譜と伝統は、守道も見ている欧陽脩の「欧陽氏譜図」にも示されており、その上、「欧陽氏譜図」を基にして永豊県沙溪鎮に立碑された「欧陽氏世次図」の、別の片面の「瀧岡阡表」に、欧陽脩が明確に自覚的に記していることであり、当然に一族の系譜を踏まえた発言といえよう。学問の家という意識は、子供の欧陽浚に宛てた「勸学箴」

『巽斎文集』巻二七」という文章に、とりわけ明確に示されている。この文章は、標題が端的に示しているように、学問の大切さを説いており、最初に「丙午十二月四日」の日付が記されている。守道は、嘉定二年（一二〇九）に誕生しているので、この「丙午」は淳祐六年（一二四六）と考えられる。

文章は、初めの方に「已む能わざるを懐い、韻語を作りて以て之を貽す」とあって、四字句を基調とした韻文で書くことを断っている。そして、こうした文章形態や文章を書く動機などを語った後、欧陽氏一族の系譜を悠久の昔から唐宋に安福県令となった欧陽万に至るまで簡単に辿り、それが「欧陽氏譜図」や「瀧岡阡表」に記されていることを確認して、欧陽氏一族が学問の家であることを喚起する（「我家上世、詩書紹読」）。次に欧陽守道に直接に繋がる支派、ことに守道の父親の欧陽悦以来の学問教育に言及し、欧陽浚もそうした一族の伝統を体現して一生懸命に努力するように慫慂している。ことに「学ばざるが如き有れば、恃みて以て生くる無く（有如不学、無恃以生）」「学ばざれば下愚にして、身は辱められ家は傾く（不学下愚、身辱家傾）」と述べて、学問をしないと生きる手段を失い、身を破滅させ、家を没落させると強い口調で警告していることは印象深い。それもこれも、「兎年

の浸く長ずるを念い（念兎年之浸長）」とあるように、この時点で欧陽浚が幼児を脱したばかりであり、それだけに「爾が児嬉を視るに、我が心は孔だ悼む（視爾児嬉、我心孔悼）」とあるように、遊び盛り悪戯ざかりの息子の将来を心配した欧陽守道の親心から発している。

学問に専念することは無論だが、生活はどうあるべきなのだろうか。学問を暮らし方に譬えて論じた文章があるので、まず、それを紹介することから始めよう。文章は「題張和伯実軒」（『巽斎文集』巻二二）と題し、張和伯という筠州高安県（江西省高安県）に住む人物の書斎「実軒」に因んで記されている。欧陽守道は、実際に目にしたという二人の農民を取り上げている。両者とも沢山の土地を有する農民だが、一方は一生懸命に農業生産に従事し、出掛けるときに使用する車に屋根は無く、食器は極くありふれた陶器、身につけている衣服も質素なもの、付き合っても田舎の農民たちであった。他方は、色彩豊かに飾り立てた立派な家に住み、外出に使用する馬車は屋根付きで名馬に引かせ、食器も衣服も贅を尽くし、来客は音曲や歌舞でもてなした。最初は、両者は同じ程度の資産をもっていたが、質素な暮らしの農民は、やがて財産を殖やしたのに対して、贅沢な暮らしの農民は年月を

追って財産を減少させていった、と。欧陽守道は、この対照的な二人の生活振りの農民を引き合いに出して、大切なことは、「実」であり、学問も上辺を飾る「外」を重視するのではなく、「内」を充実させることが肝要だと説いている。慎ましい「実」のある生活の重要性を認識していたのである。

質素な生活振りの提唱は、別の箇所にも少し言葉を換えて登場する。『巽斎文集』には、既出の「勸学箴」の直前に「食箴」と題する文章があり、そこでは農業の苦勞を思えば食糧を無駄にすべきでない主張するが、そこに次のように説く。

人間は適切な程度のところまで満足すべきで、これといった仕事もせずに無為徒食することを恥ずかしいと思うべきだ。腹一杯に飯を無理に詰め込むよりは、粗食に甘んじて空腹を満たす方がよい。沢山に求めすぎることは、分を越えた所行であって、飽くことなく貪り食べることを「饕餮」といい、恥ずかしげもなく求め続けることを「鋪啜」というのだ。(人当知足、素餐是愧、敢饜于腹、維此疏食、以美予飢、過此有求、非分所宜、貪暴無饜、名曰饕餮、干求無恥、名曰鋪啜)

ここでは、欲張らず質素な生活を心掛ける信条を「知足」という言葉に置き換えている。こうしてみると、欧陽守

道は、慎ましかな生活を信条としながら、実のある学問をし続けることこそ、欧陽氏一族の族人としてふさわしいと考えていたが、それはもちろん、彼自身が生涯に互って実践してきたことであつたのである。

ところで、族人の自覚を促すという族譜の機能に対する欧陽守道の捉え方それ自体は、「欧陽氏譜図」とともに「近世譜」の嚆矢に挙げられる蘇洵の「蘇氏族譜」にも端的に見られ、取り立てて欧陽守道に特異な意識とはいえず、加えて欧陽氏が学問の家であるという意識も、別稿で示したように欧陽脩にも見られる。とすれば、宗族をめぐる欧陽守道自身の独自性は何か、とりわけ欧陽脩との間に時代的相違は見られるのだろうか。最後に、この点に言及しよう。

欧陽脩の考えは別稿でも論じた問題であるが、行論の都合から、まずその考えを確認しておこう。「(集本) 欧陽氏譜図」の「序」には、欧陽氏一族の伝統に対する欧陽脩の基本的な認識が示されている。そこにはこうある。欧陽氏は唐末・五代以来、廬陵の大族として知られ、とくに真宗の咸平三年(一〇〇〇)、欧陽観・欧陽穎・欧陽曄の三人が科挙に及第し、それから三〇年を経過して仁宗の天聖八年(一〇三〇)に欧陽脩と欧陽乾曜が科挙に及第したが、それ以降は三〇年も経

つのに進士となり仕官しているものは、脩と乾曜の二人だけに過ぎなく、一族の伝統を考えると何と少ないかというのである。そして、こうした寥々たる状態の認識の上に立つて、自分（脩）は幼少時期に父親に死別して祖先の遺徳を充分には聞いていないけれども、それでも天子に忠節を尽くし親に孝行を捧げ、官吏としては廉潔で学問で身を立ててきた伝統はよく承知していると述べる（「然伝於其家者、以忠事君、以孝事親、以廉為吏、以学立身」）。ここには学問の家として官僚を輩出してきたという士大夫・士人の一族としての強い矜持が窺われる。

歐陽守道も、仕宦をして上は君主に仕え、下は民衆を庇護する役割を果たし、その結果、一族に繁栄をもたらすという考えに異論はなかった<sup>⑧</sup>。しかし、既に検討した「勸学箴」を見ると、学問をすることと仕宦とを直接には結びつけて論じてはならず、「我が家は、上世、詩書紹続し」とあるように、一途に学問の家であることを強調する。しかも、「こうした詩書の学問をしなければ、この家は成り立たない。お前の食べ物は何を耕して獲得するのかというと、ただ学問だけが農民の耕作地と同様だと心得よ。お前の住まいの屋根は何によって覆われているかというと、ただ学問のみ屋根と心得よ

（無此詩書、無此門戸、爾食何耕、惟学爾士、爾居何覆、惟学爾宇）」とあるように、身近な暮らしを譬えにして学問の必要性を説いている。ここには在地の士人として、更には若いときに実際の農作業をして暮らしを立ててきた人間特有の思考がみられる。同じ学問を強調するにしても、視点の置き所が異なり、やはり南宋末の在地の士人として生涯の大部分を生き抜いた欧陽守道の生き方が反映されているといえないだろうか。

## おわりに

小論は、晩年近い一時期を除いて、生涯の大部分を在地の士人として暮らした欧陽守道を検討の対象として取り上げ、士人の地域社会と宗族との関わりを考察してきた。彼の生活は若年時にはとくに貧しく、農作業の下働きまでしながら勉学に励んだ。三〇歳頃になると、彼の学識と誠実で親孝行人柄とが世間に知られ、その後、生涯に互る天職ともいえるべき仕事として、地方社会の子弟教育に携わり始め、教え子の中から文天祥や劉辰翁といった南宋末・元初を代表する文人・士大夫が巣立っていった。在地との強い結び付きは、在地の

問題を守令に提言するだけでなく、その問題解決に向けて彼自身の主体的な実践活動を促していった。そうした提案や実践活動には、南宋末吉州の地域社会の不安定な状況が色濃く反映されていた。他方、歐陽氏一族の族人としては、一族の結束の契機となる族譜に強い関心を寄せ、その関心から歐陽脩の「歐陽氏譜図」の杜撰さに厳しい批判を行った。そして、その批判の中に、欧陽脩が郷里に住むことなく、死後も他郷に埋葬された生き方に疑問を寄せる気持ちを滲み出させていた。そこには、生涯の大部分を在地に生きた欧陽守道の生き様、もつというと南宋末という社会において在地化の傾向を強めていた士人意識の時代性を垣間見ることができよう。欧陽守道が強い関心を寄せた族譜は、欧陽守道によると、一族の成員としての自覚を高める機能をもつと考えていた。更に、一族であることの自覚を通して、欧陽守道はひたすら学問を行うこと、慎ましい生活に心掛けることを一族の伝統として身につけること、更にはそれを後世に伝えてゆこうと強く意識していた。しかも、こうした学問追究は仕宦を主な目的とするのではなく、農業を初めとした身近な仕事と同様の、一つの職業、いわば家学として学問に携わることを生涯に互つてし続けてゆくべきだという、いわば地に足をつけた思考法

である。「吾が郷は江右の文献国為るも、公卿・大夫の比肩・切武〔前後して接する〕するに在らざるなり。命に窮達有り、位に高卑有るも、徃往、各の風節〔風格と気節〕を以て自ら植立す」と述べて、廬陵が世間的な榮達とは別に高い志を有する土地柄だと主張していることは、そうした在地の士人として学問人生を生きてきた欧陽守道の矜持の現れといえないだろうか。

以上、小論がこれまで論じてきたことである。しかし、ここまで論じてきて大きな疑問に突き当たるだろう。つまり、欧陽守道の記述から、南宋末の混乱した在地の社会状況が見出されるけれども、それではそうした混乱に在地の士人や士大夫が、どのように連携して対処し、地域社会の秩序を維持しようとしたのかといった点である。加えて、吉州のような宗族組織の目立つ社会の中で、地域社会の維持に宗族は深い関わりをもっていたと推測されるのであるが、それでは宗族が地域社会の問題とどう関わっていたのかという課題が浮かび上がってくる。そして、士人・士大夫は、こうした混乱した社会の中で、自己の宗族をどのように生き残らせていこうとしたのであろうか。いずれにせよ、こうした疑問や課題に、小論が依拠した『巽齋文集』は充分な史料的解答を用意して

くれない。いずれ他の士人・士大夫の残した史資料を視野に入れて、こうした課題に取り組まねばならぬだろう。

## 註

- (1) Robert M.Hartwell "Demographic, Political and Social Transformation of China, 750-1550," *Harvard Journal of Asiatic Studies* 42:2, 1982.  
Robert P.Hymes, *Statesmen and Gentlemen: The Elite of Fu-chou, Chiang-hsi, in Northern and Southern Sung* Cambridge U.P., 1986.
- (2) (1)の「宋元明移行期」論は、ポール・スミスとリチャード・グレン・クラム両氏 (Paul Jakob Smith and Richard von Glahn) の編集による論文集 *The Song-Yuan-Ming Transition in Chinese History* (Harvard U.P., 2003) に展開されている。スミス氏の "Introduction (導論)" に論理的説明がなされている。なお、この書物の詳細な紹介と批評は、中島樂章氏によって行われている (『中国——社会と文化』二〇〇号、二〇〇五年)。
- (3) 南宋社会が明清時代に繋がる要素を準備し、北宋とは異なる様相を見せていたという内藤湖南の指摘の重要性については、私は、様々な機会に触れてきたが、その最初は「内藤湖南の中国近世論と人物論」(内藤湖南研究会 編『内藤湖南の世界——アジア再生の思想——』河合文化教育研究所、二〇〇一年)と題する論稿である。
- (4) 『支那近世史』(『内藤湖南全集』巻一〇、筑摩書房、一九六九年、五一—四頁)。
- (5) 廖咸惠 (上内健司 訳) 「墓葬と風水——宋代における地理師の社会的地位——」(『都市文化研究』二〇、二〇〇八年)、同(今泉牧子 訳) 「『小道』の体験——宋代士人生活における術士と術数——」(『都市文化研究』一三三、二〇一一年)。
- (6) Ann Gerritsen, *Jian Literati and the Local in Song-Yuan-Ming China*, Leiden, Brill, N.Y., 2007. この問題は、Chapter

Four S<sup>1</sup> "Imaging Local Belonging in Southern Song and Yuan Jizhou" に集中して論じられる。なお、私は、この著書の紹介と批評を公表しているが、『名古屋大学東洋史研究報告』三五、二〇一一年)、ここでは著者の氏名を英語読みに「ゲリツェン」と記したが、書評の公表後の指摘もあって、小論では著者の母語のオランダ語読みに「ヘリツェン」と表記する。

(7) この『歐陽氏六宗通譜』(国会図書館蔵)は、歴代の族譜にあつたとされる「譜序」には、かなり偽作があつて信用できないが(拙著『歐陽脩 その生涯と宗族』創文社、二〇〇〇年、六五・二六頁参照)、系譜は他の史料と突き合わせてもかなり正確であるように思える。

(8) 天祥『文山先生全集』巻二「祭歐陽巽齋先生」に、「維歲次癸酉正月乙卯朔越七日辛酉、学生具位文某、謹致祭於故先生殿講大著刑部巽齋歐陽公楫前、(中略)先生官二著不為小年六十五不為天」とある。なお、李裕民『宋人生卒行年考』(中華書局、二〇一〇年)は、『宋人伝記資料索引』に載る宋人の生卒の誤りや不明を中心に宋人の生卒を考証した労作であるが、歐陽守道の生卒に関する考察はない。

(9) 『宋史』巻四二「歐陽守道」伝に、「初名巽、自以更名庶宰非是、当祭必称巽」とあり、また『巽齋文集』巻一「張景韶巽齋序」に、「某本名巽、既易名窃第、念旧名乃先子所命、不忍舍去、因以名齋」とある。

(10) 『歐陽氏六宗通譜』(『儒学志』「巽齋公伝」)に、「巽齋公諱守道字公權、巽齋其別号也、安福令万公五世孫堂之派、於万公為十五世孫、世居廬陵永和鎮」とある。

(11) 『歐陽氏六宗通譜』の「永和派世次」第一四世に歐陽悦と夫人胡氏、一五世に歐陽守道と兄の歐陽晋卿の名前が記されている。

(12) 『巽齋文集』巻二〇「尹希聖詩集後」に、「憶、予如子年時、卒業纔識畦逕、先子令初讀詩書、不許輒作文字、去今二十余年、猶無所得、予之不敏如是」とある。

(13) 『巽齋文集』巻二二「送彭士安序」に、「予未第時、艱難困苦不減君、惟稍稍知書之有味、不肯舍去、間嘗為人作賤藝、力稍休、輒讀書、或時藝於手、書在目、隣家有瞶我者、見其積藝執卷於雪簷間、踰月而令其子從我學、自此遂就書館、稍稍得錢」とある。

(14) この逸話は、『宋史』の本伝や『南宋書』巻五七「歐陽守道」伝などに載るが、元・劉岳申「書黃弥高所藏其先孝友故牘」(『全元文』二一冊、卷六六五)に、「巽齋先生初為里巷趙德善教子、每食、輒持婦以奉其母、趙有賢妻、日必置饌二、而致其一於其家、曰先生之母食矣、先生樂為尽云々」とあつて、歐陽守道の母親に対する孝行の一環としてこの逸話を少し詳細に記す。

(15) 『歐陽氏六宗通譜』の「永和派世次」によると、歐陽守道の兄の晋卿には、三人の息子がいたとあるが、今は『宋史』巻四二「歐陽守道」の記述に従う。

(16) この廷対を巡る応答と徐儼夫との遣り取りは、『宋史』巻四二「歐陽守道」に載っている。また、この年の合格者名簿は、龔延明・祖慧 編『宋登科記考』(江蘇教育出版社、二〇〇九年)によつて分かる。

(17) 『文山先生全集』巻一〇「巽齋先生像贊」に、「歐陽巽齋、望宗六一、辛丑授科、親老謝職」とある。

(18) 江万里の吉州知事就任や白鷺洲書院の創建に関しては、尹波『江万里年譜』(原載『宋代文化研究』四、一九九四年、『宋人年譜叢刊』一一、四川大学出版社、二〇〇三年再録)に詳しい。歐陽守道が白鷺洲書院に招かれたことについては、この『江万里年譜』淳祐元年の条にも欧陽守道「白鷺洲書院山長序記」(『巽齋文集』巻一四)に、「某昔嘗侍古心先生于書院初建之歲」とあり、

また「歐陽文忠公祠記」の冒頭に、「淳祐初、今參知政事古心江先生守吉州、予以進士為郡客」と引用する文章によって知られる（『歐陽文忠公祠記』は四庫全書本『巽齋文集』には未収。尹波氏は、『万曆吉安府志』巻三五から引用している。ただ、『宋文』巻八〇一九（第三四六冊）は、『同治永豐県志』巻三三三や『民国吉安県志』巻四七所収文を収録しており、そこでは「沙溪六一祠記」に作る。なお、歐陽守道が、この白鷺洲書院を一月も経たずに辞めたことについては、『巽齋文集』巻一「通判漢溪運使書」に、「昨者古心江先生將漕、亦嘗招而館於所雙桂堂者、半月而告歸、踰旬而得請」とあることによる。引用文の江万里が「將漕」つまり江西転運判官となったのは、上記の『江万里年譜』によると、淳祐二年（一二四二）であり、したがって引用文の白鷺洲書院を一月未満で辞めたとも、この頃のことと考えられよう。

(19) 『巽齋文集』巻一「通判漢溪運使書」に、「某有母年八十有一、体氣日衰、疾不時愈」とある。なお、この題名下には、「戊申年、時荆溪漕江西」とあつて、この戊申は、淳祐八年のことと思われる。

(20) 尹波『江万里年譜』宝祐三年の条、熊飛『文天祥年譜』（前掲）『文天祥全集』附録の宝祐三年の条、劉宗彬『劉辰翁年譜』（『吉安師專學報』第一八卷第三期、一九九七年、前掲）『宋人年譜叢刊』一二冊所収。

(21) 『巽齋文集』巻二五「經訓堂記」に、「予廬陵族也、宝祐癸丑夏四月、始來長沙、讀書嶽麓書院、有講書君諱新字仲齊者、以高年篤學見推流輩、見予來甚喜、數出講書業示余、余心敬之、問其世次云々」とある。

(22) 吳子良が湖南転運（副）使になった日時は、李之亮『宋代路分長官通考』中（巴蜀書社、二〇〇三年）九九七頁を参照。た

だ、典拠として引用する『浙江通志』が嘉靖・康熙・雍正のいずれかを明記していない。ちなみに、李之亮氏は多くの編纂書を出版しているが、それらには多くの問題点があることが指摘されている（東英寿「李之亮箋注『歐陽修編年箋注』の問題点」『比較社会文化』(一七、二〇一一年)には、『歐陽修編年箋注』だけでなく、他の編纂物の杜撰さも紹介している）。

(23) 『南宋館閣統録』巻八・巻九（中華書局、一九九八年の排印本『南宋館閣録 統録』では、三一〇・三三三・三五三頁）。

(24) 館閣の簡単な説明は、前掲排印本『南宋館閣録 統録』の「前言」にもあるが、詳しくは、梅原郁『宋代官僚制度研究』（同朋舎、一九八五年）第四章「宋代の館職」に見える。

(25) 『巽齋文集』巻二二「題方山長鄙能小藁」に、「余在中秘時、連歲考太学公試、得莆田方君善夫之文、皆質前等、初以為君精學子業而已、余寓舍与後村劉公隣、君見先生、退必過予問」とある。

(26) 『宋元学案』巻八八「巽齋学案」の「博士劉須溪先生辰翁」に、「劉辰翁、字会孟、号須溪、廬陵人也、巽齋弟子」とある。

(27) 『文山先生全集』巻一〇「巽齋先生像贊」に、「横経論道、一世宗師、及門之徒、不將即相、河汾王通、雲竜下上、名齋以巽、殊非過情、六一学実伝先生」とある。また、歐陽守道に学ぶ人の多さを、同じ文天祥は、「吾郷歐陽巽齋先生、講学天出、從游滿門」とある。

(28) 『巽齋文集』巻四、一二葉裏に、「是時某在長沙、家人皇駭走書趣歸」とある。

(29) 劉辰翁『須溪集』巻三「社會記」に、「巽齋先生無位而一食三歎、無食而急人朝飢、他日懷編書示予、独欣然如有飽食、曰、此喻邑西溪劉氏社會記也、人人有此心、亦人人能之而不為、蓋吾予之所共愧也、彼將斬予記其倉、予欲伝其約予郷、自是常慨然



為來客誦之、而未及記而先生卒、(中略)蓋橘者告予、日夜夫婦相泣、既而水声如投石者不絶、常數人、及旦、來者乃已、殆不可數也、彼特中人無策、羞見閭巷、故出此、而官以道殮告者、一朝而百余不与也、於時鬻翁流涕、解衣易米、更相為粥、以食餓者、(中略)暨鄉都軼政、強者乾没偽占、弱者捩鞋受少、独区区藉虚声出藏粟耳、此無他、無社倉之故也」とある。

(30) 『巽斎文集』卷二「送張伯深序」に、「舜申信善人矣、死而有人称、固不必殊常甚偉之行也、道人善予有願焉、道一張舜申之善、冀為張舜申者千百也、而州里為渠土矣」とある。

(31) 『巽斎文集』卷六「上徐守書」に、「廬陵凋瘵之極、不幸猶蒙富州之名、民不幸十室九空、而公家猶意其儲蓄、士大夫不幸洗手奉公、而或者猶疑其攫拏、偶有租稅蠲減之請、持之而不下、歲糶之數、率倍他州、諸司繕錢、略無寬假」とある。

(32) 『巽斎文集』卷七「送倪秘監序」に、「咸淳戊辰春、天子趣親秘書監倪公于吉州、婦侍講席、送客皆有詩、某独無、至江亭拳酒為公祝曰、(中略)公為天子牧小民有年矣、前日外郡四方水干盜賊、願以上聞而不可者、今談經之次可言也云々」とある。なお、標題の「倪秘監」が倪普という人物であることは、『万曆吉安府志』卷三「秩官表」によって判明する。この「秩官表」では、咸淳初に吉州に着任していたとあるが、『南宋館閣統録』卷七「官聯」の倪普の項に「三年十二月以直章閣知吉州兼江西提舉司農少卿、未離任間、四年正月除、統準御筆兼侍講、当年四月供職」とあるので、咸淳三年に吉州知事となり、一年ほどで離任したことが分かる。

(33) 『巽斎文集』卷三「通蕭宰書」に、「有志之士、得百里之地而為之宰、便應以教化為第一事、以風化之美惡為己責、邑而無字、猶当自我創立、況所素有者乎、若之何以文具視之、(中略)自紹興以來、百余年矣、其間賢令慨然有志於斯者、猶可一一數、

中間稍失初意、士各取贖以帰、而堂序齋牖空無一人云々(中略)明府之至、倘不廢罷此例、則別挾德望之可以信服諸生者延賓之斯席、某何人哉、致書之始、未敢遽及」とある。

(34) 「宋代吉州の歐陽氏一族について」(『東海大学紀要文学部』六四、一九九六年、「宋代吉州の歐陽氏一族」と改題して、拙著『歐陽脩 その生涯と宗族』創文社、二〇〇〇年に所収)。

(35) 歐陽脩の文集として一般的に使用されてきた四部叢刊『歐陽文忠公集』(元代の影印本)「居士外集」卷二には「集本」と「石本」という二種類の「歐陽氏譜図」が載っている。「石本」は、熙寧三年(一〇七〇)に郷里の吉州永豊県沙溪鎮龍岡に父母を顕彰する目的で立碑された「龍岡阡表」の、もう片面に刻み込まれた「歐陽氏世次碑」の元になった文章である(「歐陽氏世次碑」は『廬陵古碑録』(江西人民出版社、二〇〇七年)などに全文が見られる。「集本」は、拙稿「歐陽脩における族譜編纂の意義」(名古屋大学東洋史研究報告)六、一九八〇年、前掲拙著『歐陽脩 その生涯と宗族』所収)において考証したように、岑仲勉氏が「元和姓纂四校記」で主張するような「石本」を訂正したものではなく、「石本」の元になった「初本」である。近年の『歐陽文忠公集』に対する優れた校注である洪本健『歐陽修詩文集校箋』(上海古籍出版社、二〇〇九年、下冊一八七二頁「箋注」の「一」と一八八二頁「箋注」の「一」)も、「集本」は内容から見て石本の修改本とすべきだ(由内容観之、當為石本之修改本)として、岑仲勉氏と同様の主張をしており、更に「集本」を「石本」と同じ熙寧二年(一〇六九)に作成されたとする新説を公表している。洪本健氏の「内容から見て」が何を指すのか判然としないが、しかし「集本」の「序」に端的に窺えるように、「集本」は「石本」よりも文章が錯雑しており、内容からしても、文章が整理された「石本」の

方が後であると思われる（歐陽脩の文章は推敲を経た後のものが整っている）。ちなみに、『歐陽修詩文集校箋』は、『歐陽文忠公集』の全部に互る校注ではなく、「居士集」五〇巻と「居士外集」二五巻のみである。この校注の特色に關しては、東英寿氏が簡にして要を得た紹介をしている（『歐陽修詩文集の決定版——『歐陽修詩文集校箋』上・中・下——』『東方』三四五、二〇〇九年、「洪本健校箋『歐陽修詩文集校箋』」『中国文学報』八〇、二〇一一年）

(36) 『通譜』〔目錄〕「安福府君分衍六宗図」に、「安福一世至五世、分六大宗、謨為安福洞淵宗、託為廬陵安德宗、諒為安福黃石宗、堂為廬陵永和宗、弘為廬陵釣源宗、戊為安福義歷宗」とある。

(37) 『通譜』〔儒學志〕「巽齋公伝」に、「巽齋公諱守道字公權、巽齋其別号也、安福令万公五世孫堂之派、於万公為十五世孫、世居廬陵永和鎮」とある。

(38) 『巽齋文集』卷一七「龍須山旂檀林記」に、「是山（龍須山——引用者）予之先塋在焉、展省松楸之余、入方丈見此老、每覺清言有味」とあり、また同書卷一七「巴通閣記」に、「閣在永樂寺、寺在梅山、山在廬陵泉儒行郷、予之先祖墓三世与之隣云」とある。

(39) たとえば、周必大『文忠集』卷三二「郷貢進士歐陽耿仲弁墓誌銘」に、「歐陽氏族望廬陵、而家於永和鎮者、尤以儒稱」とあり、また、胡銓『胡澹庵先生文集』卷二六「歐陽先生墓誌銘」に、「歐陽之居永和者、登第踵武、而貢於太常者相望也、郷曲号为儒材名族」とある。

(40) 『巽齋文集』卷一九「書歐陽氏族譜」に、「予歐陽氏家吉州、自唐中世刺史府君始、大約距今五百余年、子孫散居諸邑、或徙他州、不可尽攷、姑以見居而未徙者言之、戸不啻百計、丁畜千計矣」とある。

(41) 周必大『文忠集』卷七五「歐陽元鼎墓誌銘」に、「嘉泰三年

三月癸酉、故人歐陽彝字元鼎、以疾終於家、（中略）自以世著節義仕宦不絶、彙次家譜（中略）然念三世暨諸兄、率不及下寿、乃絶意外慕、安於間適、故得年六十有九」とあり、また同書卷四九「書歐陽彝四世碑」に、「友人歐陽彝字元鼎、世居廬陵郡之永和鎮、今為族長、儒学行義、表表一郷」とある。

(42) 森田憲司「宋元における修譜」〔『東洋史研究』三七一—四、一九七九年〕。

(43) 劉辰翁『須溪集』卷六「王氏族譜序」「秦和胡氏族譜序」「吳氏族譜序」、文天祥『文山先生全集』卷九「燕氏族譜序」。

(44) たとえば、牧野巽「明清族譜研究序説」〔『牧野巽著作集（近世中国宗族研究）三、お茶の水書房、一九八〇年〕、多賀秋五郎『中国宗譜の研究』（日本學術振興會、一九八一年）五一頁、一一七頁などに指摘があり、枚挙に暇がない。

(45) 『万曆吉州府志』卷一一「風土志」に次のようにある。「至歐陽脩一代大儒、開宋三百年、文章之盛、士相繼起者、必以通經学古為高、以救時行道為賢、以犯顔敢諫為忠、家誦詩書、人懷慷慨、文章節義、遂甲天下、故家世胄、族有譜家有祠、歲時祭祀必以礼、長幼之節、疏不間親、貴必下賤、蒼頭臧獲、長子孫數十世、名義相統属不絶、家範肅於刑律、郷評嚴於斧鉞云々」。

(46) 羅大經『鶴林玉露』乙編卷五「肴核对答」。

(47) 『巽齋文集』卷八「陳舜民詩集序」に、「天宝後、詩人好為愁苦羈寓之詩、吾家六一翁載此於五行志」とあり、同書卷一六「嘉蓮亭記」に、「予曰、子未説吾家六一公所記許子春園亭乎」とあり、同書卷二〇「跋趙武德墓誌銘後」に、「某伏誥至武德公會祖馮翊侯之諱、忽憶馮翊侯之配郭氏墓誌銘、乃吾家文忠嘉祐間奉勅所撰」とあり、同書卷二二「書會梅齋過六一祠堂詩」に、「吾家六一翁、生於綿長於隨」とあり、同書同卷「題懷芳小草後」に、「吾家六一翁、銘其墓曰」とあり、同書卷二五「平坡説」に、

「平泉李文饒所居也、平山吾家六一公所堂也」とある。

- (48) 『全宋文』卷八〇一九「沙溪六一祠」に、「淳祐初、今參知政事古心江先生守吉州、予以進士為郡客、先生問曰、此州天下称欧郷、想文忠公後甚盛、子於公幾世乎、予対曰、非也、予之先世墳墓遠者二百年皆幸存、而名諱・官職・所居、所葬与公瀧岡阡表無一同者、欧郷之称、亦不起于公、蓋自南唐時、郡為欧陽進士表坊里已有之矣云々」とある。

(49) 註(35)の前掲拙稿「歐陽脩における族譜編纂の意義」。

- (50) 歐陽守道は、「歐陽氏譜図」の収録範囲が狭く、現実の歐陽氏一族の勢力を反映していないという指摘を、「書欧公帖」(『巽齋文集』卷一九)という文章でもしている。それに、「今吾郡吾氏支派甚衆、必皆刺史子孫、而譜不可考矣、文忠謂子孫或居安福或居吉水、或居廬陵、或之者疑之也、蓋此時已不能尽知、故其所書之名、纔止數房、然譜所不書、謂之非此族類則不可也」とある。

- (51) 『歐陽文忠公集』集古錄跋尾卷七「唐歐陽瑰碑」に、「余自皇祐至和以來、頗求歐陽氏之遺文、以統家譜之闕、既得顏魯公歐陽瑰碑、又得鄭真義歐陽敞墓銘、以与家所伝旧譜及陳書元和姓察諸書參較、又問於呂学士夏卿、夏卿世称博学、精於史伝、因為余考正訛舛、而家譜遂為定本」とあり、歐陽脩が「歐陽氏譜図」の編纂に当たって呂夏卿に協力してもらったことを記す。

- (52) 『宋史』卷三三三「呂夏卿」伝に、「夏卿学長於史、貫穿唐事、博采伝記雜説數百家、折衷整比、又通譜学、創為世系譜表、於新唐書最有功云」とある。

(53) 註(35)の前掲拙稿「歐陽脩における族譜編纂の意義」。

(54) 『巽齋文集』卷二「書曾樽齋過六一祠堂詩」。

- (55) 歐陽脩の父母あるいは祖先の墓地の管理に関しては、拙稿「歐陽脩と母親鄭氏」(一名古屋大学東洋史研究報告)

三三三、二〇〇九年)に詳しく論じておいた。

(56) 『後漢書』列伝卷一四「馬援」伝。

- (57) 前掲、羅大経「鶴林玉露」乙編卷五「肴核対答」に、「楊東山嘗為余言、昔周益公・洪容齋嘗侍寿皇宴」とあり、また『宋史』卷三七五「洪邁」伝にも孝宗朝に詞臣として活躍したことが記されている。

(58) 『容齋統筆』卷一六「思穎詩」に、「公生四子、皆為穎人、瀧岡之上、遂無復有子孫臨之、是因一代貴達、而墳墓乃隔為他壤、予每統二序、輒為太息、嗟乎、此文不作可也」とある。

- (59) 『鶴林玉露』卷五(卷数は稗海本、中華書局(一九八三年、唐宋史料筆記叢刊)の点校本では甲編卷一)「仕宦掃故郷」に、「然公自葬鄭夫人之後、不復掃故郷、(中略)雖有此言、而迄不踐、寒穎昌山水、作思穎詩、退休竟卜居焉、前輩譏其無回首敝廬、息肩喬木之意、近時周益公掃休、尹直卿以詩賀之云、六一先生薄吉州、掃田去穎昌遊、我公不向螺江住、羞青原白鷺洲」とある。

- (60) 『巽齋文集』卷二「黃師董族譜序」に、「私家世次之絶統、係於天下世變之盛衰、姑以吾家論之、十世之間、幸而有可考者、由吾宋承平之時以至於今也、等而上之、雖欲知不可得矣」とある。また、『巽齋文集』卷二「題醴陵李氏族譜」に、「故曰、生平今之世、而欲上考世系於厥初、生民以來、未有得其真者也」とあって、当時の大部分の族譜の世系に対して疑いの気持ちを持っている。いたらしい。

(61) 「瀧岡阡表」に示されている歐陽氏一族の学問的伝統の問題は、拙稿「歐陽脩の後半生と宗族」(『東海大学紀要文学部』七〇、一九九九年、前掲拙著「歐陽脩 その生涯と宗族」に「壮年期の蹉跌と宗族」と改題して所収)。

- (62) 『蘇洵「嘉祐集」』卷二三に「蘇氏族譜」を所収するが、その「序」に、「嗚呼、觀吾之譜者、孝弟之心、可以油然而生矣」とあり、

族譜が族人としての意識を高める機能をもっている一例として  
先行研究でも多く引かれてきた。たとえば、多賀秋五郎『中国  
宗譜の研究』上（日本学術振興会、一九八一年、一一一頁）。

(63) 註(61)前掲拙稿「欧陽脩の後半生と宗族」とくに前掲拙著『欧  
陽脩 その生涯と宗族』二七九頁参照。

(64) 『巽斎文集』巻一〇「送孫季山序」に、「士君子仕行其志、固  
曰上以正主、下以庇民、而其私家亦豈不願門戸之昌・子孫族党  
之蒙其福沢」とある。

(65) 『巽斎文集』巻二七「四有堂贊并叙」。

(こ)ばやし よしひろ 東海大学文学部教授